トピックス

「本格的プロマネを　どうやって育成すべきか？」のセミナを開催しました！

去る8月28日(火)に標記「本格的プロマネ育成方法研究セミナ」を当社研修室にて開催いたしました。

この１か月前に急遽企画したものですが、夏季休暇の時期にもかかわらず20名近い方々にご参加いただき、活発な意見交換もしていただきました。

最近のプロジェクトは「短納期」「経験のない新規案件」「開発目的不明確」等々から成功裡に完成させるのは至難な状況です。しかし、プロマネだけが頑張ってもどうにもならず、企業が総力を挙げて短期的・長期的視点からこの課題に取り組む必要がある、とは衆知のことかと思います。とは言っても最後はプロマネの力に依存しなくてはならない局面も多いようで、頼りになるプロマネ、お客様やメンバに対して自信を持って対応できる

プロマネが何人いるかで、ＳＩ企業の力が決まってくるとも言われています。

弊社では1999年から“超”プロマネを育成するための実践つき研修をご提供しております。基本的な知識研修ではなく、まさに「頼りになるプロマネ、お客様やメンバに対して自信を持って対応できるプロマネ＝“超”プロマネ」の育成をご支援させていただければと始めたものです。これまでにオープン研修だけで300人強の方々に受講いただきました。この間、受講生ご本人や上司の方々から「育成の課題」についての悩みや取り組みなど伺っておりますが、その組みについて何らかの手がかりをつかんでいただく機会になればと、「本格的プロマネをどのようにして育成するかをご研究いただく」ことを主眼において開催させていただいたものです。

セミナの皮切りは、「プロマネ人材育成の仕組み構築について」と題する、株式会社アイ・ティ・イノベーション（以下、ＩＴＩ社）林衛社長のお話です。

ＩＴＩ社はＩＴ業全般にわたるコンサルティング会社としてこの業界ではつとに有名ですが、（副題である）「明るく、楽しく、元気なＩＴ組織を創造するために」ＩＴサービス部門の組織と役割を明確に示すこと、ＩＴ人材育成の阻害要因を把握すること、これからの人材像を各社できちんと決めること、そして、方法論が重要で、その方法論とは建築で言えば工法であり、工法を知らなければプロマネもアーキテクトも成り

▲林社長

立たない、というのが骨子でした。

そして、複雑・多様化しているシステム開発で品質と生産性を確保するためには、開発方法論と自動化ツールもそうですが、「開発方法論に沿って実践する人」を育成することが重要であると主張されました。さらに、この方法論と確たる持論に沿って展開された「ＰＭ育成の事例」とＩＴＩ社がお客様に勧められている教育モデルをご紹介いただきました。体系的な基礎知識の習得研修が必要であることに皆様同感されたようです。

続いて、弊社主催の“超”プロマネ養成研修の概要をご紹介させていただきました。本研修も「体系的な基礎知識の習得」の上に成り立っているもので、プロマネとしてさまざまなコミュニケーションの場をさばいてもらいたいという思いもカリキュラムの中に込めているつもりです。各回の講義、演習、演習結果発表と研究、研修終了後の講師を交えての情報交換会、そして講座最後の実践発表・研究を通じての研修効果などについてご紹介いたしました。

セミナの締めくくりは、この研修を2002年から継続して採用してくださっている富士フイルムコンピューターシステム株式会社（ＦＦＣＳ社）人材開発グループの青山潤子課長のご登場です。人材開発担当の立場から本研修採用の主旨と、ご自分も受講生として参加され今年の４月に修了されたばかりでしたので、受講当事者としての本音を語っていただきました。

本研修に受講生を送り出す立場としては、客観的な評価内容についてご説明いただきましたが、昨年度のプロジェクトを対象とした社長賞は本研修卒業生が多く受賞されたとのこと。その活用状況（効果）は弊社にとって

もうれしいかぎりです。

青山課長は、受講当時はプロジェクトリーダで、後輩を指導する立場でもあって、かなりハードな日々の中での受講でした。そのときの“２７期生”は、全員がみごとに皆勤という「伝説の２７期」として受講生の皆さんが自負され、その後話題になる研修です（当誌７６号でも報告させていただきました）。その研修期間中に、業種は異なっても、同世代で同じようなポジションのメンバと、同じ悩みを抱えている中での気づきや共有感があり、生の語り合いがストレスや悩み解消の場になり、新たな活力・ビジョンの創造につながった、ということです。

▲青山課長

続く全体質疑・意見交換では多くの質問が出ましたが、ＩＴＩ社の育成事例やＦＦＣＳ社での継続的な参加方針に関心を寄せられた方が多く、組織としての体系的な取り組みを確実に実施することが、お客様から信頼される「明るく、楽しく、元気なＩＴ組織の創造」につながるのだということを実感されたようです。

ご支援くださった林社長様、青山課長様、そしてご参加くださった皆様にこの場をお借りして改めてお礼申しあげます。

（プロマネ研修担当 田村八重子記）

目次に戻る